

「信仰の、神秘」

主任司祭 晴佐久昌英

ある青年が、初めてミサにあずかったときのこと。見慣れぬ儀式に戸惑いながらも、彼は興味深くなりゆきを見守っていた。やがて司祭が丸いパンと金色の杯をうやうやしく捧げ、会衆は深々と礼をした。その直後である。司祭が、朗々と歌い出した。「信仰の、神秘」

彼は、このことばに打ちのめされた。そうだ、信仰は、神秘なんだ。理屈でも努力でもない、神秘なんだ！

そうしてその青年は、教会に通いはじめた。10年程前の、高円寺教会での実話である。

ミサは、信仰の神秘である。ミサには、我々には決してそのすべてを知りえない、秘められたちからがある。そんなミサにとらわれ、育てられ、ミサをこよなく愛して、生涯を捧げている一司祭として、はっきり言いたい。「ともかく、みんなをミサにつれて来てほしい」と。

よく、友人をいきなりミサに連れていくのははばかりられる、という声を聞く。確かに普通の人にはなじみのない儀式だろう。しかし、ミサは神秘である。ミサをあげているのは、神である。臆することなく堂々とミサに連れてきてほしい。あとは聖霊が働いてくれるのだから。古代教会では、求道者の信仰教育の中心は、信者ととともにミサを体験することにあつた。教会はそのはじめから、ミサこそが人々を信仰に導く神秘であることを知っていたのである。

しばらく教会から離れていて、心では気かけながらもきっかけをなくしている人にも言いたい。「ミサに帰ってきてほしい」と。一度でもミサにあずかったことのある人なら、本当はわかっているはずだ。ミサのほかに帰るところなど、どこにもないということ。

この不信と不安の時代にあつて、ミサがその本領を発揮しようとしているのをひしひしと感じる。まず、ミサからはじめよう。もう一度、ミサに立ち返ろう。ミサを信じることで、人はあらたに生まれることができるのだ。今もいつも、人を救うのは「信仰の神秘」だけである。